

氏 名	つぎ た のり かず 次 田 憲 和
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 197 号
学位授与の日付	平 成 14 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学 専 攻
学位論文題目	超越論的方法と形而上学 ——フッサール現象学における「領域的存在論」の研究——

論文調査委員 (主 査) 助教授 福 谷 茂 教 授 伊 藤 邦 武 助教授 杉 村 靖 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論は序章とそれに続く第1章から第5章までの各章および終章の全7章からなる。論者はフッサール現象学の日本における受容に対する批判的回顧を踏まえ、あえて伝統的形而上学の伝統のただなかに現象学を置いて解釈することによって、従来の研究では周辺に位置していたテキストに新鮮な光を当てるとともに、現象学そのものにも不備を指摘し、独自の現象学像を樹立することを意図している。

序章は論者の全体的な見通しを述べたものである。すなわち、論者によれば、『イデーン』全3巻の意図とは、形而上学の解体と再構築という大きく分けて二つの課題を果たすことである。言い換えると、超越論的方法によって形而上学的な存在了解を徹底的に破壊した上で、それを現象学の脱形而上学的方法によって再編することにほかならない。このとき形而上学はかつて有していた第一哲学の地位を喪失し、超越論的哲学によって基礎付けられた非自立的な学、すなわち「領域的存在論」となる。『イデーン』第2巻はこの領域的存在論の構築を具体的におこなっている。この観点から見ると、第1巻の還元 (Reduktion) 理論とは形而上学解体の方法であり、第2巻の構成 (Konstitution) 理論とは形而上学再構築の方法なのである。

第1章は現象学的方法の中核をなす志向性および現象学的エポケーという概念の検討を通じて、一切の存在者を「超越論的に純化された意識存在の座標系とも言うべきものにおける意味の連関に還元して捉える」点にこそ、現象学の根本理念があることを明らかにする。これは物と心という形而上学的実体の一掃にほかならず、現象学のノエマーノエシス図式は形而上学が自明の前提としている物心図式から完全に解放されていることを論者は論証する。ここにこそ形而上学と存在論の究極の前提である実在世界という最包括的な存在領域を、上記の還元理論を導入して解体する「脱形而上学的理論」としての現象学の本質を見ることができると論者は論決する。

第2章は現象学が第1章で見たような単なる形而上学の解体であるにとどまらず、それ自体としてみるならば、実在全体を志向的構成によって自らのうちに担う高次の形而上学とも言うべき性格を持つことを論じる。超越論のエポケーとは単なる存在定立の括弧入れの操作ではなく、意識存在と実在的存在との存在論的カテゴリーの相違を際立たせ、前者を後者のメタ次元をなすものとして捉えなおすことにほかならないからである。すなわち現象学は伝統的な形而上学で言うところの一般形而上学の地位に立つ学であり、かつての特殊形而上学に相当するものとして、「領域的存在論」に従えることになるのである。論者はこの構造を、「メタ理論としての現象学が下位理論たる領域的存在論を自己のうちに『構成された存在論』として包含するという階層関係を形成することによって、形而上学が超越論的に再構成される」こととして捉えている。

第3章は、第2章で論じられたように高次の形而上学として領域的存在論を構成しなければならないという課題を背負うことによって、『イデーン』における現象学がどのような形態において展開されたか、そこにどのような問題が生じてきたかということをフッサール生前は未公開に終わり遺稿として出版された『イデーン』第2巻の分析を通じて明らかにしている。特に身体という特異な存在を取り上げて、エポケーによって一旦徹底的に排除された身体性が感覚素材を基礎としても

っとも根源的な次元から構成されてゆくありさまの記述が第2巻の眼目をなすが、論者は感覚態やキネステーゼをめぐるフッサールの記述を追跡した結果、このような手続きによる「自然の存在論」における身体構成がはらむ重大な問題を指摘する。すなわち、身体はフッサールの身体構成理論においては物的性格と心的性格ということなる存在性格が共存する特殊な実在として捉えられており、エポケーによっていかなる実在性も物質性も自然性も持ち得ないものと定義されていた意識存在が、ここでは「自己自然化」を遂行し、実在的空間時間世界のうちに自己を統覚する自己構成をおこなわねばならなくなるのである。

第4章では論者は第3章で摘出された構造、すなわち意識存在が領域的存在論を構成するという課題の遂行において自己を自己の対象とすることが不可避となり、メタ理論の主体という性格を失ってしまう事態を「自己関係の循環構造」と名付け、そこに論理的パラドックスの一種が見られることを指摘する。心と超越論的主観とは、自然のうちに位置付けて捉えるか、それとも自然の一部としての身体とのつながりを絶ち内的反省によってそのものとして純粋に捉えるかという形式的な差異はあるが、両者はともに感覚や志向性や時間性を本質とする存在者であることにおいて実質的には同一である。すなわち形而上学が必要とする階層構造がこのパラドックスによって崩壊したと論者は見ている。超越論的主観性が自己構成を遂行することにより、「自然の存在論」の内部では一旦はエポケーによって「脱実在化」された意識内容が尽く「再実在化」されることになるからである。自己構成理論は超越論的意識がその純粋性を放棄し、物質的自然と同一の空間的時間的世界に入り込むということにならざるをえないと論者は主張する。

第5章では、第4章で徹底的に論じられた『イデー』の現象学がその形而上学的性格のゆえに背負わなければならない「パラドックス」「アポリア」としての「自己関係の循環構造」が、フッサールの『イデー』第2巻の領域的存在論の実際の論述ではどのように自覚されていたかを、特にその後半部での「精神の存在論」を題材にして論じている。そして論者はここでフッサールは上述のような循環構造を自覚して解決を図るのではなく逆に「基礎付け」という先に見た形而上学的構造が要求する作業を依然として強行してしまった結果、循環というよりも空転と評すべき事態に陥ってしまっていると説得的に論じている。すなわち、「精神の存在論」そのものの実態が純然たる志向性理論にはかならない以上、そこで遂行されるのは、世界全体を環境世界として自己のうちに構成する精神の構成でなければならない。ところが実際の論述は「精神の存在論」による「自然の存在論」の基礎付けとしておこなわれており、「精神の存在論」の実質は自然的存在全般を自己の環境世界のうちに志向的に包含することにより、自然に対する精神の存在論的優位を自覚する過程の論述となっているのである。ここで生起しているのは、単に同一の次元にある「精神的存在」が「自然」を包含するという構造であり、現象学的形而上学が採用すべき超越論的構造がまったく認められない、と論者は結論する。論者によれば、『イデー』第2巻の後半部は超越論的方法による「精神の存在論」の構成論的基礎付けにはなっていないのである。

終章では以上の論旨の再確認がおこなわれるとともに、『イデー』第2巻および第3巻が結局未公刊に終わらざるを得なかった理由として、第1巻で準備された志向性理論が知覚の場面を分析することを本来の任務とした単純なモデルによるものであったため、とうてい精神的文化的世界の複雑な構造を記述することができないという限界を有していたことを挙げている。ここから生世界論へと現象学が進んでいった事情が説明されるとともに、論者自身はあくまでも先述の形而上学的構造を踏まえた現象学の道の可能性がまだ残されていると判断し、その構想を提示することで自らの将来の課題を表明して結んでいる。

論文審査の結果の要旨

現代哲学においてフッサールに発する現象学の持つ重要性は論を俟たないところである。わが国においても戦前の先駆的研究を踏まえ日本現象学会が組織されており、今日現象学研究は最も隆盛な研究分野のひとつであるといつてよいだろう。特に戦後におけるフッサール現象学の研究は、戦後はじめて公にされた膨大な遺稿の読解が研究上の最も興味ある課題となったことを背景として、戦前期の公刊著作のみに基づいたフッサール理解とは面目を一新したフッサール像を構築する作業に精力が注がれ、この領域を中心として内外において重要で古典的な多くの成果が生み出されてきた。わが国においてはこの研究状況は新田義弘氏によって先導され、氏とその影響下に立つ研究者によって、フッサールの後期思想の生世界論や発生論をこそ現象学の真髄と捉えることが1980年代までに学会でもなかば常識化したのである。

このような定説的解釈を論者は「実存主義的現象学解釈」と名付け、敢えてこれに異を唱えようとするのが提出論文の眼目をなしている。論者は自己の立場を、現象学を「形而上学の超越論的変型」と捉える試みと形容する。そして論者のこのような把握はフッサールの最重要著作のひとつに対する独自の読みによって支えられている。メルロ＝ポンティに典型的に見られると論者が見なす「実存主義的現象学解釈」はフッサールの未公刊手稿群を拠り所とすることが多いが、論者は未公刊の遺稿ないし草稿ではなく、あくまでもフッサールの生前に出版されていた著作に解釈上の原点を据え、そこから草稿を含むフッサールの全貌を理解する手法の必要性を強調する。この手法が現象学を形而上学としてみるという彼独自の解釈を可能にしたのであり、そのために論者が選んだテキストが『イデーン』である。

この著作は現行のフッサール著作集では全体が3巻からなるが、フッサールによっては第1巻のみが1913年に出版されており、残りの部分はフッサール自身によってほぼ同時期に一応完成されながらも公にはされず、その後も絶えず手を入れつづけた後、結局遺稿として1950年代になって出版された。したがってこれは、公刊著作から草稿を解釈するという論者の主張する手法の有効性を試す絶好の試金石たりうるものである。

第1巻は言わば方法論であり、「現象学的根本考察」と題された核心部分において、素朴な自然的態度を斥けて純粹意識の領域と超越論的主観性という根源を一元的に確立するための現象学的還元理論が展開されている。これに対して第2巻は「構成の現象学的研究」と題され、第1巻とは言わば逆方向に、物質的自然、動物的自然、精神という三つの層をなす個別的領域を、超越論的主観性を出発点として第1巻で明らかにされたノエシス＝ノエマ構造によって構成してゆく作業が遂行されている。

論者の『イデーン』解釈の特色はこの書が、生前未公刊部分を含めて非常に緊密な体系性を持っていると判断し、特に第1巻と第2巻とが形而上学という補助線を引くことによって一体的に捉えられ、それによってさらに従来ほとんど看過されていた第3巻の意義を確定できると主張する点にある。この解釈を裏付けるために論者が注目するのが、第1巻冒頭で課題として予告され定義される「領域的存在論 *regionale Ontologie*」という概念であり、ここからして第2巻で構成されてゆく上記の三領域は領域的存在論の実現として考えられるのである。こうして『イデーン』の第1巻および第2巻は存在論の基礎付け作業およびその実現として完全に形而上学のフレームワークに属することになる。

論文第1章によれば、『イデーン』第1巻で遂行される現象的還元の理論とは、対象を素朴に物自体と見なし世界を自存的な物の集合と考えることによって、主観—客観関係をはじめとする数多のアポリアに陥るという伝統的な哲学、特に認識論の基盤にある特定の形而上学を破壊することを目的としている。論者は「超越論的方法による『形而上学の解体』」と題されたこの第1章においてフッサールに従いながら古代から経験論とカントを経てマッハにいたる哲学者の認識理論を批判的に論じている。多かれ少なかれ形而上学的な実在観を脱し得ないそれらの全体と厳密に区別される現象学の「非形而上学的性格」とは「一切の存在者をこの超越論的に純化された『意識存在』の座標系における意味の連関として捉えていく」手続きとしての「現象学的エポケー」という根本理念に現れているのである。つまり、現象学の成果であるノエマ＝ノエシス構造はこころの内と外という対立を、対象と作用を純粹志向性の運動のうちに解消する点で、実体が構成する世界を前提して認識関係を捉えるという伝統的な形而上学を解体するのである。

これに対し第2章「超越論的方法による『形而上学の再構築』」は、フッサールの存在論的洞察を軽視するハイデッガーの批判を再批判した上で、「『イデーン』という著作は、3巻全体として見れば、単にエポケーや志向性理論（ノエシス＝ノエマ理論）という現象学の基礎的『方法』について解説した『方法論』の書物なのではなく、エポケーによって悪しき伝統的形而上学ないし存在論の依って立つ基盤を『解体／破壊』したうえで、それを超越論的方法（超越論的構成理論）を通じて『領域的存在論』として新たに『再構築』することによって基礎付け、かつ物理学や心理学などの経験諸科学を超越論化されたこの存在論の下位に従属したものとして根拠付けようと目論んだ学問の基礎付けの著作なのである。」という主張を論証する。すなわち論者は、第1巻の巻末でふたたび登場し第2巻の主題となる領域的存在論を、通常理解のように第1巻を踏まえてあくまで形相的に三領域を構成する単なる形相学とは捉えず、実質的にエポケー以前の形而上学ないしその世界をそのまま再現するという機能を果たすものとして捉えている。こうして、解体された実体的形而上学ではないが、しかし同じ内容がノエマ＝ノエシス構造から導出され、現象学は新たに根拠付けられた形而上学という性格を得るのである。

ところがこのことは現象学にとって非常な難問を生み出すことになる。論者はそれを第3章から第5章までを費やして

「超越論的形而上学の構成論的問題」のⅠ、Ⅱ、Ⅲとして徹底的に論じている。取り上げられる論材は多岐にわたっているが、特に第3章、第4章では上のように理解された領域的存在論が背負わねばならない事情が「パラドックス」として定式化され、突っ込んで論じられている。すなわち、超越論的主観性が諸領域を構成することとは、例えば第2巻のはじめで取り上げられる自然の存在論においては、純粹意識がそれが本来有していた超越論性を喪失し、心の内的状態として身体の内側に封入されることにほかならないと論者は指摘する。構成することにおいて、いかなる実在性も自然性も物質性も持ち得ないものと定義されていた意識存在が、実在的空間時間世界とそこでの因果作用の内部に存在するものとして自己自身を構成しなければならないというのである。この事態がはらむ論理を論者は「自己関係的循環構造」と名付け、特に第4章で集中的に検討している。「超越論的主観性が外界の物質的自然の構成を遂行するのみならず、構成主観である自己自身を構成する」ことは、「存在論全体のメタレベルに位置すべき超越論的意識理論が、対象レベルに位置する自然主義的存在論のうちに逆に組み込まれてしまう」ことにほかならず、結局、「超越論的方法はその方法自身を駆使することによって記述される存在論的成果の一部において、この方法やその主題領域の本来の特徴とは全く反対の『実在論』の特徴を生じざるをえない」と論者は指摘する。自然主義的存在論に含まれた一つの実在者が現象学的還元を行うことで世界の超越性を奪ってそれをノエマ＝ノエシス構造に吸収し、次に逆転してそれを起点として領域的存在論がふたたび「自然の存在論」を構成する、という循環がここに現れていると論者は見る。こうして一般形而上学が下位区分として特殊形而上学を持つという階層的な形而上学的構造は安定することができないのである。

このような「自己関係的循環構造」の露呈を『イデーネ』第2巻第1章および第2章に即して確認したあとさらに『イデーネ』第2巻第3章の実情が問われるのが、本論文の最終章である第5章の課題である。論者によれば、第3章「精神の構成」は循環ではなくむしろ「空転」という結果に終わっている。なぜならば、その実質は「『精神的存在』が「心／身体／物質」などの『自然的存在』全般を自己の環境世界の内に包摂することにより『自然に対する精神の存在論的優越性』を自覚するに至る過程の叙述」にほかならないからである。

こうして論者の見るところ、『イデーネ』全3巻は形而上学を目指しながら、形而上学としての役割を果たし得ていない。論者によればその原因は『イデーネ』が立脚するノエマ＝ノエシス理論が物質的对象についての知覚を記述するためには有効であるが、相互主観性や精神的人格の自我などの高次の存在者を解明することができないからである。そのために必要なのは複雑な存在構造を記述し得る高次の「意識存在論」あるいは「絶対精神の存在論」である、と論者は結論する。こうして、単なる生世界と日常性の素朴な記述でしかない現象学を排し、あくまでも形而上学的構造に裏付けられた現象学の構想を論者は自己の将来の課題として述べて、筆を擱いている。

以上のように、提出論文は通説に異議を唱え、自己の観点を精力的に立証し、あるべき現象学の理念を提出した野心作であるといえる。しかし、自己の論点を打ち出すことに急であるあまり、フッサール以外の哲学者の所説の理解がやや図式的であり、フッサール現象学の基本概念の理解も過度の単純化が行われている点が認められるなど、不満点も存在する。特に領域的存在論を形相学とせず、実質化している点は提出者の論理にとって要であるだけに、さらに徹底した論証を要求したいところである。

しかしながら論者の現象学に対する造詣の深さは端々に窺えるのであり、上記のような野心的なプロジェクトに一定の成果を上げた点は高く評価されねばならないだろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2001年12月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。